

都市と川

一色史彦

去年の七月中旬、一週間の予定で、台風が中国地方を襲った直後の萩市に赴いた。台風一過の萩はすばらしくった。まだ国鉄線は、いたる所で寸断されていたため、いつもならば若い人達で混雑する筈のこの時期に、充分萩の美しさを味わうことができた。

萩には、語るべきものがたくさんある。毛利三十六万石の城下町。明治維新の立役者達の旧宅。武家屋敷の築地塀と夏密柑畑（序でながら説明を加えると、ポスターでお馴染みのこの風景は、維新後の各城下町ではよく見られたもので、武家屋敷の建物を次々に取り毀わして、そのあとに桑、茶、密柑などを植えることが奨励されたのである。）こうしたことがらは既に知られていることだから、ここでは都市と川の問題に絡らめて萩を紹介しよう。

まず、私たちの基本的態度を明らかにしておきたい。私たちの研究室では、この数年都市の研究に携わってきた。

た。とくに、日本の古い都市。集落の空間的調査によって、伝統的な日本人の生活環境を知り、日本の都市のありべき姿を考えよう。それには、航空写真と定規。コンパス式の現在の都市計画の手法は、日本の風土にまったく不似合であるというのが、私たちの考えである。近頃の下手を都市改造の内でも、とりわけて腹立たしいことがある。それは、都市内の水路を次々に埋めて道路。駐車場に変えてしまうことである。その姿勢たるや、まことに安直至極。そこには、自動車増による交通事情の悪化という口実があるのだが、このような対症療法からは将来の都市展望など生まれることはない。近い将来の都市内交通体系の中で、現在の道路体系がどのような役割を担えるのだろうか。自動車メーカーですら、ごく近い将来、自動車にかわる交通手段の出現を確言している。気付いてみたら、都市内の水面がまったく失なわれていた、などという事態は避けねばならない。私たちは英知をもって、都市を見直すべき時なのである。

さて、話をまた萩にもどそう。

萩市の観光案内書によると、「萩市は、中国山脈に源